

P2-003

自閉症スペクトラムなどをもつ幼児の
ソーシャルスキルトレーニングにおける
レスポンスコスト法の効果について

笹川 彩¹、高橋 桃子¹、佐藤 菜穂¹、富尾 則子¹、
荒川 千賀子¹、小平 隆太郎¹、瀧上 達夫¹、
藤田 之彦²、高橋 昌里¹

¹日本大学 医学部 小児科学系小児科学分野、

²日本大学医学部医学教育企画・推進室

【目的】

自閉症スペクトラム障害や注意欠如/多動性障害をもつ児に対して社会的に好ましい行動を定着させるために、トークンエコノミーシステムによるバックアップ強化子の付与や強化子の付与、レスポンスコスト法などが有効である。レスポンスコスト法とは減少させたい問題行動が生じた場合に、事前に与えておいた強化子を没収するという方法である。当院で行っているソーシャルスキルトレーニンググループではトークンエコノミーシステムや強化子の付与を行っているが、さらにレスポンスコスト法を試験的に導入し、レスポンスコスト法が行動修正に効果がみられたかを検討した。

【対象】

自閉症スペクトラム障害、注意欠如/多動性障害などの診断を受けてソーシャルスキルトレーニングに参加した児を対象とした。

対象児はIQが境界知能(71~84)以上であり、参加期間が10ヶ月以上であった13名(男児12名、女児1名、SST開始年齢3歳0ヶ月~5歳8ヶ月、IQ平均92.7、IQ標準偏差16.9、最大値123、最小値73)であった。

【方法】

対象児13名中6名の児は修正困難な問題行動がなかったため、『先生の話は黙って聞く』『手はお膝で座る』の2つを目標にし、目標達成した場合には強化子(例:アニメや電車のカード)のみを付与した。2つの目標に関しては口頭指示だけでなく、『先生の話は黙って聞く』『手はお膝で座る』の絵カードも一緒に呈示した。

このような場面設定の工夫や絵カードなどの介入でも効果を認められなかった7名にレスポンスコスト法の導入を行った。7名のうち3名の児には個別目標を設定しトークンエコノミーシステム(バックアップ強化子の付与)とレスポンスコスト法を実施した。4名の児には個別目標を設定し、強化子の付与とレスポンスコスト法を実施した。事前に養育者と話し合い強化子(例:アニメや電車のカード)よりも好きなお菓子やジュースが良いという児にはバックアップ強化子(例:ジュースの引換券)を付与した。

【結果と考察】

レスポンスコスト法の効果を分散分析した結果、「不注意/多動性」症状が見られる児にレスポンスコスト法が有効であることが分かった。(F(1,4)=34.588, p=0.004)。しかしレスポンスコスト法を導入しても行動修正までの期間に個人差があり、効果が顕れにくい児も存在し、個人内要因が大きいことが示唆された。

P2-004

発達障害児への看護実践に関する研修プログラムに必要な内容

— 保護者が必要とする看護支援と看護師の
学習ニーズから —

坪見 利香^{1,2}、中野 さちこ²

¹浜松医科大学 医学部 看護学科、

²豊田市こども発達センター のぞみ診療所

【目的】

本研究は、発達障害と診断されている子どもの保護者が必要としている看護支援と一般の医療機関における発達障害児への看護師の対応に関する研修ニーズから、発達障害児への看護実践に関する研修プログラムに必要な内容を明らかにすることを目的とする。

【方法】

1) A県B市の専門外来に通院しているADHDあるいは自閉症スペクトラムと診断を受けた子どもの保護者147名に、子どもの外来受診で困る診療科と内容について調査した。2) A県内で小児科・耳鼻咽喉科・眼科・皮膚科を標榜している診療所の看護師239名に発達障害児への看護実践に関する知識、希望する学習内容について調査した。本研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果と考察】

発達障害児の保護者が困難を感じた診療科は、耳鼻咽喉科、歯科、眼科で多かった。外来受診で保護者が対応に困難を感じた子どもの行動は、待合室で落ち着いて過ごすことができない、採血を嫌がる、医師の問いに答えられないことであった。子どもが待合室で診療を受ける心理的な準備が整っていない場合、子どもが診療で体験する視覚、聴覚、嗅覚などの五感に対する感覚特異性由来する反応によって不安や恐怖が増幅されるため、ことが困難につながることが明らかになった。発達障害児の保護者が必要とする外来看護実践は、待合室での子どもの過ごし方、予防接種・採血など痛みを伴う処置への対応、器具を用いた診療への対応、子どもが理解できる説明の工夫が示された。外来看護師の調査より、半数近くが自己学習の経験があると回答しており、発達障害に関する関心が高いことがうかがわれた。看護師の発達障害児への対応に関する知識は、パニックを起こした時の対応、待ち時間の過ごし方の知識が低いと感じており、具体的な看護支援に必要な知識が獲得できていない状況が示された。看護師の研修ニーズは、子どもが理解しやすい説明、子どもの特性を考慮したうえでしてはいけないこと、診察や処置での子どもの言葉かけ、パニックを起こした時の対応、待ち時間の子どもへの過ごし方が示された。

【まとめ】

発達障害児への看護実践に関する研修プログラムは、発達障害の特性、保護者が子どもの受診で困ること、感覚過敏などの障害特性によって生じる子どもの苦痛の理解と、看護師が具体的な対応ができることを目指す必要がある。本研究は、科研費(25463468)の助成を受けて実施した。